



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 2001, 0104s: 1037-1045

ISSUE DATE:

2001-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196552>

RIGHT:



京大広報

(号外)

2001 4

目次

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば	1038
修士学位授与式における総長のことば	1040
博士学位授与式における総長のことば	1042

大学の動き

平成12年度卒業式	1044
平成12年度修士学位授与式	1045
博士学位授与式	1045

医療技術短期大学部の動き

平成12年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式	1045
----------------------------	------



平成12年度卒業式



卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成13年3月26日

総長 長 尾 真

21世紀の最初の年に社会に出ていく2,829人の皆さん、京都大学卒業まことにめでとうございます。ご来賓の元総長、名誉教授の先生方をはじめ、各学部長、教職員とともに、卒業生諸君とご家族の皆さんに対し、心からお祝いの言葉をお送りいたします。

さて、21世紀は情報の時代であり、情報社会が実現すると言われております。政府は、昨年IT戦略会議において、日本の情報技術（IT）の発展と社会への定着を検討し、それを基にして「高度情報通信ネットワーク社会形成基本法」を作るとともに、予算の重点配分をすることによって、社会の情報化を強力に推進しようとしております。電子商取引の促進や電子政府の実現などがその中に含まれ、情報利用の機会均等が目ざされています。

これは社会に多くのことをもたらすでありましょう。社会生活が便利で豊かになることが望まれます。また企業内での情報のやりとりだけでなく、企業相互間での契約や取引といったことまでが、電子ネットワークを介して行われるようになっていくでしょう。特に注目すべきことは、インターネットをはじめとして、種々のIT応用システムが各家庭に導入され、単に電子メールのやりとりだけでなく、いろいろなことがどこにいても実行することができることになることです。そこで、これを積極的に利用する人と、これを利用しない人、利用できない人との間に大きな差が出てくるのではないかと心配され、情報技術の教育の重要性が認識されつつあります。

そういった中で最も顕著なことは、情報の洪水という現象があることであります。テレビはこれからますます多チャンネルになっていくでしょうし、新聞・雑誌もあらゆるところで読まれています。たとえば我が国における出版物の点数は、1980年には年間約2万8千点が出版され、約10億6千万冊の販売がありました。1998年には書籍の刊行点数が約6万3千点で、販売冊数は約15億2千万冊となっており、また月刊誌は約29億冊、週刊誌は21億冊出ております。最近2、3年間は、全体の伸びは鈍化しておりますが、その分インターネットなどの情報に移



って行っているとみることができます。

今日インターネット利用者は、日本において約2,000万人と推定されていますが、これから我が国のIT振興策によって、小中高校でのコンピュータリテラシー、インターネット利用法の教育の普及によって、さらに急速に増えていくことが予想されます。それに伴って、全ての人がそれぞれ情報発信をしますから、世界中からぼう大な情報が刻々と流されて来て、我々は情報の洪水に右往左往させられることとなります。そして、人はますます瞬間的に物事の判断をし、行動をすることが要求されることになるのであります。企業は半年ごとの業績が問われるとともに、日々の株価変動に浮身をやつすこととなります。またジャーナリズムが主体となって企業間の優劣比較を行い、優良企業のランキングを毎年発表します。大学においても、教育、研究の成果、さらには卒業生の社会での活躍の程度などが、各大学間で相互比較され、ますます競争をあおるといった時代となって来ており、今後この傾向はさらにひどくなっていくだろうと思われま。

このような状況になりますと、人々はいやおうなく、その時々、情報に強く影響され、これに対応しなければならなくなっていく。情報化時代はスピードが要求されますが、日々変化する不確実な情報に一喜一憂しなければならなくなり、こうして人々の行動、企業の活動、政府の施策といったことが、表面的な現象に対する対処療法的なことに終始することになってしまうのであります。これはよく考えれば異常なことでありま。情報化時代は、人

に物事を深く考える時間を与えないところに、大きな問題をもっているのです。

皆さん、一度海岸に行き、打ちよせる波を何時間もじっと観察してみませんか。そして波の原因について考えてみるのです。波の表面的な現象だけを見てはなりません。その裏にはその波を生じさせる水の回転運動と海底の地形があり、またはるか彼方からくる長周期のうねりがあることを知らねばなりません。それは一体どこから来るのでしょうか。このように、目に見える波がどうして起こされているかという根本原因に、しっかりと目をむけて考えることをしなければ、波の現象の真の姿は捉えられません。

同様に、日々の情報の洪水に対して、その場で反応しているだけでは、物事の本質的な解決にはなりません。報道される種々の事柄についての真の原因がどこにあるのかを考え、長期的な視野のもとに物事の判断をしなければなりません。そういった形で、しっかりした物の見方をもち、長期的な意味での発展は望めませんし、また日々の判断にも誤りを来たしてしまうことになります。10年前のバブル期に多くの企業が、競争相手の企業がこうしたから我が社も負けずにこうする、といったやり方に熱中するあまり、長期的な視野にたつたとき、どのような問題をもたらすかに気付かなかった結果が、今日の日本経済の悲惨をまねいている一因であります。自分の哲学をもたず、忍耐力をもたない人達の醜い争いの結果であります。

日々の不確実な情報に対して、どう対処したらよいかと迷った時は、物事の根本に帰ることが大切です。それはまず第一に、学問にたよることです。今日大学で講義されている学問は、実際世界で役立つ空理空論である、といった非難がなされることがありますが、それは目先のことのみに囚われている人の言うことでしょう。たしかに学問内容と実際の現象、現実の世界との間には大きな隔たりがあるかもしれません。しかし学問は物事の本質を示してくれます。その本質と目の前の現実の間を埋めるのは、講義での説明であり、セミナーにおける議論であります。そして、諸君はそのような訓練を受けて来たのであります。

社会に出ると、その訓練と自分の経験を生かし、

よく物事を観察し、学んだ学問に照らして深く考察をし、そのギャップを埋めることが必要となります。現実には千差万別であり、それらの現象全てについて、大学で詳しく説明をすることはできません。学問は、そういった種々の現象に対する基本的な考え方を与え、なされるべき判断へのヒントを与えてくれるものなのであり、学問をいかに応用し、活用するかは諸君のこれからの研鑽にかかっているのです。

技術革新とグローバル化にともなう今日のような激しい社会の変化に対して、企業や組織がどう対処していくべきかは、大きな問題であります。諸君は社会に出て10年もすれば、そういったことに対して自分で判断を下し、物事を実行していかなければならない責任ある立場に立たされます。他人に頼って、言われたことをしていればよいといったことは許されず、自分の責任において決断をしなければならないことになります。

この時にどうするかは諸君の情報収集能力、論理的判断力とそれまでに得た諸君の貴重な経験によるわけですが、より基本的には諸君の人生観によるのであります。社会における問題には数学の問題の解のように唯一の答といったものはほとんどなく、考え方によって無数の解がありうるのであります。それは多くの未知の周囲条件をどのように推定するかということにもよるわけで、諸君の経験と直感に基づいて推定し、最も適切な解を選ばねばなりません。そこに諸君のもつ世界観、人生に対する態度が現れてくるのであります。

これからは情報の時代であるといわれ、より多くの情報を得るものが勝利をおさめるといった事がよくいわれますが、世の中の現状はかならずしもそうではありません。むしろ情報の洪水の中で、どう物事をきめればよいか分らずに、結局解決を先延ばしするといったことばかりがなされているのであります。

機が熟さないから我慢して待つということはあり、その我慢をするだけの忍耐力を持つことは大切なことではありますが、最近は決断することができなくて、無策に先延ばしをしてばかりいるといったことが多すぎるのであります。自分の人生をかけて決断しなければならないということは、長い人生において、誰にでも二度や三度はかならずあります。その時にどう決断するかがその人の真価を問われるわ

けですし、それが誤まらずに行えるためには、日頃から物事を深く自分で考え、精神を鍛錬していなければなりません。打ちよせる波をじっと眺め、何時間もよく考えることによって、その動きの本質が分ってくるのと同じであります。その考える努力の方向は拝金主義といったものでなく、真実を求め、世の中の道理を知り、社会に少しでも貢献するという使命観を目ざすものでなければなりません。

こういったことは、大学でどのように自分の学問をしたか、どこまで深く人生を考えたかによります。諸君は頭脳明晰で、いざとなれば相当なことが出来る能力と集中力をもっていることは間違いありません。しかし、諸君の人生を支える根本的な物の考え方を、学生生活の間に身につけたかどうか、もっと大切なことです。だからといってあまり心配しないで下さい。そういったことを身につけるのは、誰にとっても簡単ではありません。学生時代だけでなく、常に絶えまなく学び、よく考え、精神の鍛錬を行うことによって、徐々に確立していくものなのであります。

学問は大学の努力によって自律的に進歩発展し、社会を豊かにしていきます。一方では、社会は常に新しい問題をひきおこし、大学はこれに答えるべく研究し、その結果を社会に還元しながら、学問を発展させることもしています。学問の根本は変わりま

せんが、その発展は日進月歩であり、常に変化していております。したがって、根幹となる学問以外の専門的学問分野は10年もすれば全く新しくなり、これから社会に出ていく皆さんも、しばらくすると学問の新しい展開について学ぶ必要が出てくるにちがいありません。

大学はこういった場合に対して社会人入学という制度をもち、社会の人々を受け入れておりますから、皆さんも再び京都大学にもどってくることができます。これからは生涯学習の時代であります。大学は諸君の心の古里であるとともに、実際に諸君が必要とするときに、適切な学問・知識を与える場であり、いつでも戻ってくるのできる故郷であります。

情報の洪水にまどわされず、新しい学問を必要に応じて学び、自分で深く物事を考え、目の前に現れる困難な問題にたち向って行く勇気を与えるのが大学であります。困難に出合った時は京都大学を思い出し、いつでも相談のため、学習のため、また憩いのために戻って来て下さい。京都大学は暖かい心で皆さんを迎え入れるでしょう。京都大学という偉大な故郷があるという安心感を持って出立して下さい。

これからの困難な社会を少しでも良くするという使命感をもって、存分に活躍して下さいを期待し、京都大学の教職員一同は諸君を社会へ送り出すのであります。

修士学位授与式における総長のことば

平成13年3月23日

総長 長 尾 真

21世紀最初の春に、修士の学位を得て社会に出ていく1,866人の皆さん、おめでとうございます。ご列席の名誉教授をはじめ、各研究科長、教職員とともに、皆さんの前途を祝福いたしたいと存じます。

さて、皆さんは修士課程2年間の研究と論文の作成によって、学問とはどういうものであるかが、よく分かって来たと思います。学問には大きく分けて、対象を記述的に説明し明確化することを中心とした

学問と、できるだけ一般的な法則をたてて、対象に対して論理的な説明を行い、さらにそこから新しい物事を推論することに中心をおいた学問とがあります。人文社会系の多くの学問は前者に属しております。これに対して、後者の代表的なものは理学・工学であり、これらにおいては、確立した一般的な法則を用いて、既存の物事や現象を説明するだけでなく、いまだ存在しない新しい物を創造し、未来に起

こりうる現象を予測します。そしてその予測が当たることによって、予測に用いた法則がさらに確実なものとして信頼を獲得するということになります。

たとえば生物学は、これまでは記述的学問の典型でありました。その中心は、生物の分類に関する学問であったと言ってよいでしょう。しかし、DNA、遺伝子が明確になってからは、明らかに推論的な学問に変わりつつあります。生命の基本的な原理が分かって、その原理にのっとって地球上に存在する生命の説明を行うことのほかに、遺伝子組み替え技術を使って新しい生命を作り出しつつあります。

経済学も、徐々に記述的学問から推論的学問の方向へ向かっていると言ってよいでしょう。種々の経済指標をもとにして、社会経済の状況をできるだけ良い方向に持っていくべく操作・舵とりが行われ、それが近年かなり確かなものとなって来ているように見えます。

このように学問の発展は、存在するものの理解と説明、すなわち過去への視線から、将来ありうべき物事の予測、未来への眼差しという方向へ進みつつあります。知識や経験がぼう大に蓄積されて来た今日、こういったことは、学問の世界だけでなくあらゆるところでの現象であるようにみえます。たとえば我々一般庶民の生活においても、人生設計という言葉が作られ、人間の一生が設計的な観点から考えられるようになりました。すなわち、人は生れてから、どのようなルートで教育を受け、大学を卒業したら、どんな企業に入って活躍し、老後はどのように過ごすかといったことが、いろいろと考えられ、親は子供をそのように育てるために懸命になり、子供もそのルートに乗らねば敗者であるかのように思ってしまうような雰囲気社会を作り出して来ました。

ところが昨今の日本や世界の経済・社会状況を見ますと、こういった予測的なことが恐らくもう成り立たないのではないと思われる状況となりつつあります。大企業が倒産し、銀行も整理統合されるという時代となり、日本経済の先行きには不安材料が山積するようになりました。政府のかかえる負債はぼう大であり、人々は萎縮し、経済は縮小再生産という悪循環に陥りつつあるようにも見えますし、また極端なインフレの生じる危険性も否定することができません。また一方では、長寿高齢社会となり、年

金の問題、医療保険の問題など、次々に庶民社会の根幹にかかわる問題がつけつけられるという状況があります。しかし一方では、ベンチャービジネスや新しいネット産業がどんどん出てくるなど、これまでになかった事態も生じています。つまり何が起るか分からない時代が来ようとしているのであります。

こういった未来予測の困難性は、社会現象だけでなく学問の世界でも明らかになっているのであります。既に知っている人も多いでしょうが、カオスと呼ばれる現象がそれであります。力学は確立された学問であり、数式を用いて明確に規定されるものであります。数式で記述されるシステムは過去から未来にわたって時間軸上で確定した動きをするから、この数式をたよりにすれば未来は予測できると一般には考えられます。すなわち、このようなシステムでは、入力に与える値や状況がほとんど同じなら結果もほとんど同じになると常識的には考えられます。しかし、カオス現象を持つシステムの場合は、それが成り立たないということが明らかとなっております。どれだけ類似した状況に対しても、結果は全くちがうものになるということがあり、結果は出て来るまで予想がつかないのであります。したがってあることの結果を予測しようとするとき、それに似た過去の経験から同じような結果を推定することは不可能なのであります。

このように数学的に明確なシステムでも未来予測は出来ないわけでありますから、状況のはっきりしない経済現象などで、将来何が起るかを予想することは至難の技であるのは当然であります。今日、日本経済の先行きについての不安材料はこと欠かず、暗い将来を予測する人達が急速に増えて来ております。そういった時に頼りにできるものは何なのでしょう。お金でしょうか、財産でしょうか。そうではないでしょう。そういったものがほとんど頼りにならないことは、50数年前の敗戦を経験した我々の世代の人達には当然のこととして分かることであります。

このような不確実な時代に社会に出ていく皆さんが頼りに出来るのは、自分の就職する企業でもなく、国でもなく、自分だけであるという状況になるかもしれないのであります。したがって、ここで皆さんはあらためて自分の持つ実力というものを、よく考

えてみる必要があるでしょう。専門的知識や広い教養、物事を的確に判断できる能力など、実力にはいろいろな面があるでしょう。しかしここで最も大切なものは、どのような波瀾万丈の時代が来ようとも、何とかしてこれを克服していくという知力と気力、精神力、忍耐力をもつことでありましょう。大学で、単なる知識としてののみ学問を学んだというのでは、あまりにも寂しい事です。学問は実践に結びつけられねばなりませんし、また学問をすることによって、自分を精神的に鍛え、どんなことが起こっても的確な判断を下して行動に移していけるという自信を持つことが必要であります。

皆さんは大学を卒業し、また京都大学大学院修士課程を修了するという、二つの大きな関門を通過した人達でありますから、学問に裏打ちされた自信を十分にもち、これからの困難な時代にもしっかりと生きていくことができるでしょう。もしそのような自信を持ってない人がこの中にいるとすれば、それは残念なことです、しかし決して遅くはありません。卒業後こそ、自分にあった学問を自分流に学び、そういった自信と精神力を持てるように引き続いて努力することができるのです。チャンスはいくらでもあります。またそういった自信を持っている人の場合も、学問は急激に進歩発展し、また変化していておりますから、絶えず学ぶ努力を惜しんではなりません。

皆さんがこれから社会に出て、長い人生を生きていく目標は何でしょうか。経済的に成功することでしょうか。そのために経済学や経営学、あるいは技術を学び、金もうけのために知識を使うといった考え方をするとすれば、あまりにも浅はかな人生であ

り、人生に値しない人生であると言わざるをえないのではないのでしょうか。今日新聞紙上などで、やれベンチャーだの、新しいビジネスモデルだのといったブームに便乗して、金もうけ主義、拝金主義の風潮が取りざたされていますが、それは人を誤らせるものではないのでしょうか。

こういった風潮に対する反省が、今日徐々に出て来ていることは確かであります。今日政治学の世界でも、ジョン・ロールズの提唱した「正義論」がますます注目を集めるようになって来ていますし、経済学の分野でも1998年ノーベル経済学賞を受けたアマーティア・セン氏の経済学における庶民への視線、経済活動における行動規範、倫理、文化の重要性といったことが、これからますます大切になっていくと考えます。

皆さんは、どのような困難に出会っても、学問的に、また社会の道德規範にてらして、自分が正しいと思うところを実行すること、これが最も大切なことであります。自分が正しいと思うことが、広く社会的に見ても正しく、妥当なことであるべきことは当然必要ですが、これは皆さんが大学で蓄積した教養に基づく人格によって導かれるものであります。

混乱の時代はまたチャンス時代であります。皆さんの前途には、予定されない、また予測できない、いろいろなチャンスが待っているのです。そのチャンスは人によって訪れ方が違うでしょう。それぞれがそれぞれのチャンスをつかみ、それを最大限に活用するのは、皆さんの実力によるわけであります。そういった限りないチャンスを秘めたこれからの時代に出ていく皆さんに、激励の言葉を贈り、皆さんの修士修了をお祝いいたします。

博士学位授与式における総長のことば

平成13年3月23日

総長 長 尾 真

本日ここに京都大学博士の学位を得られました課程博士400人、論文博士101人の皆さん、おめでとう

ございます。ご列席の各研究科長とともに心からお慶びいたします。

さて学術は20世紀の百年の間に目ざましい発展をして来ました。そして皆さんの努力によって、また一歩進められたわけであります。このようにして、将来とも学術はたえまなく発展していくことはまちがいありません。しかし一方では、その発展を妨げる要素も出て来つつあります。

地球上の資源は有限であることがますます明確になって来ました。文明が進展すればするほど、資源はどんどんと消費され、そして廃棄物がそれ以上の割合で増えており、これが一つの大きな問題となっております。国内に廃棄場所を見つけることは困難となり、外国にまでこれを持ち出し、他国に大きな迷惑をかけ、多くの問題を引き起こしていることは、新聞やテレビなどでも報道されているところがあります。

この問題を解決するためには、どうしても資源のリサイクルという概念を導入し、一度使った資源を、部品交換などのリニューアルによってまた使うとか、他の製品ののための資源として再利用するという道を開かねばなりません。こういったことを促進するために、特定家庭用機器再商品化法（略称、家電リサイクル法）が制定され、これから本格的にリサイクルを実施しようとしております。しかし一般的なリサイクル、あるいは広く資源の本格的な再利用の研究は始まったばかりです。まずなんといっても資源の浪費をしないように、我々全てが努力しなければなりません。

この、物事を循環させて利用するという考え方は非常に大切であります。海の水は蒸発し雨となって大地をうるおし、また海にもどるという循環をしております。生物にもいろいろな意味で循環があります。春に出た草花は実をみのらせ、これが大地にもどってまた春になれば芽ばえるわけであります。

物事の無限の発展のためには、このようなサイクルをえがく構造が内部に存在しなければならないことは、ヘーゲルのいう弁証法的発展によらなくても当然のことではありますが、これは数学的にも明らかにされております。たとえば自然数は無限にありますが、これはある数に1をたすということの繰り返しによって全てをおおうという、繰り返しの構造によって実現されます。このようにみると、無限の発展のように見えるものも、それは表面的なことであ

り、それを支える基本は有限のものであると考えることができるのであります。

したがって、ヨーロッパ近代に確立した進歩発展、過去より未来へ直線的に文明が発展し、歴史が作られていくという概念はかならずしも唯一の物の見方や概念ではなく、むしろ東洋的な輪廻の思想の方が地球上の現象の背後にある物事の本質をつかんでいるかもしれないのであります。特に今日地球上の資源が有限であるという観点からすれば、全てについての循環の概念を明確にもち、これを大切にしなければならぬといえるでしょう。そうでなければ永久の生存ということはありません。これまでの西洋の進歩の概念では行きづまると最近いろいろな分野で言われ、東洋的な考え方の再評価がされ始めていますが、それは理由のあることであります。

直線的発展という考え方や輪廻の概念で物事をとらえる考え方のほかに、物事は衰退していくのだという考え方もあります。万葉集の世界は我々日本人の心の古里であり、それ以後今日までの日本精神はおおらかさを失い、枝葉末梢的になって来ている、古代日本の精神に立ち帰るべきだという本居宣長の主張はその例でありましょう。全く同じようなことは、古代ギリシヤの思想へもどれという西欧における何度もの反省運動といったことにもあります。一般にエポックメイキングなことの後はほとんど全てにおいて、その発展とは言っても実はその具体化や解釈のし直しなどの方向のもので、進歩というよりは退歩といったような現象が指摘されているわけであります。人間の成長をながめても、20歳前後をピークにしてその後は徐々に精神も肉体もおとろえていくことをさけることはできません。日本は何年か前に世界の経済大国として一瞬間のピークを達成しましたが、その後今日まで衰退の一方であり、はたして再び立ちなおれるのかどうか問われています。

このようないろいろな考え方がある中で、それでも時間だけは一直線に過去から未来に向かって動いていっているとだれもが考えています。しかしこれにも違った考え方があります。たとえば、未来が我々のところにやって来る、即ち未知の世界が現実となって現れるのだという考え方もあるわけです。

もっと違った考え方をするのは、鎌倉時代前期の

禅僧で日本最初の哲学者といってもよい道元でありましょう。道元は「時は飛去するとのみ解念すべからず」といっています。時間はどんどん過去へ向かって飛び去っていくのではない、この世界にある全ての存在は、つらなりながら時をなしているのである、存在がすなわち時間だ、といえます。だから眼前に立つ松も時であり、風にざわめく竹も時であると観ずるのであります。過ぎ去ったものはない、全てが眼前に現在として展開しているのであるといえます。

このようにいろいろな物の見方がある中で、これからの世紀は、何が社会の主たる価値観になるのだろうかという問題は、非常に興味のあることであります。よく知・情・意ということが言われます。この三つの概念がどうしてこの順に並べられたのか不思議な感じがします。しかし西洋の歴史も日本の歴史も、よく考えるとこの知情意の順番で社会の価値観が入れかわって輪廻転生して来ているように見えます。たとえばギリシア・ローマ時代は意から知へ展開していった時代、そしてキリスト教という宗教の支配した中世をへて、再び意志の力が支配したルネッサンス時代というように、歴史は変遷して来たと考えられましょう。そしてそれ以後現代までは知の時代であり、科学技術が目ざましい発展をしたわけであります。

日本の歴史についても、奈良、平安、鎌倉...と、現代に至るまで、そのような概念的な当てはめをすることができるでしょう。いずれにしても現代が知

の時代であることを疑うことはできません。しかし時代は徐々に再び、情の時代、すなわち心の時代に向かいつつあるのではないのでしょうか。人々は科学技術に驚きの声をあげ、その恩恵を十分に受けながらも、それでは満されない心の持主が増えつつあると感じられもするのであります。

いろいろなことを羅列的に申し述べて来ましたが、これは、物事にはいろいろな見方があること、自分が当然と思っている考え方も、他の人はかならずしもそうは思っていないこと、またこういった多くの考え方の中で自分は何を信じるのかということが大切であり、これを皆さんに問いかけたいからであります。こういったことについて、皆さんそれぞれに自分の考え方があるでしょう。博士論文の研究のためには、ある一つの観点から物事を深く追求することが必要だったでしょう。しかし、博士学位を取得したいま、皆さんはもっと広い立場から、ここに述べましたような種々の考え方について理解を深めるとともに、世界が現在直面している多くの深刻な課題に対して、自分はどのように判断し、立ち向かっていこうとするのかということをよく考えていただきたいのであります。特に物事が、直線的に過去から未来に向かって進歩発展していくといった単純で楽観的な考え方では、これからの世紀を生きていくことは出来ないであろうことを考えていただきたいのであります。

皆さんのこれからのご活躍を期待して、私のお祝いの言葉といたします。

大学の動き

平成12年度卒業式

3月26日(月)午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各部局長等の出席のもと、平成12年度卒業式が挙行された。京都大学交響楽団による式典曲「輝を垂れて千春を映さんとす」の奏楽、京都大学合唱団による学歌斉唱の後、長尾 真総長から、各学部代表に学位記が授与された。

続いて、総長の式辞があり、最後に「蛍の光」を全員が合唱して、午前10時50分に終了した。

本年度の新学士は、総合人間学部137人、文学部204人、教育学部71人、法学部434人、経済学部259人、理学部279人、医学部98人、薬学部89人、工学部947人、農学部311人の計2,829人であった。

平成12年度修士学位授与式

3月23日（金）午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各研究科長等の出席のもと、平成12年度修士学位授与式が挙行された。

長尾 真総長から各研究科代表に、学位記が授与された後、総長の式辞があり、午前10時40分に終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科110人、

教育学研究科37人、法学研究科68人、経済学研究科51人、理学研究科217人、薬学研究科71人、工学研究科597人、農学研究科250人、人間・環境学研究科111人、エネルギー科学研究科113人、アジア・アフリカ地域研究研究科2人、情報学研究科178人、生命科学研究科61人の計1,866人であった。

博士学位授与式

3月23日（金）午後1時から、総合体育館において、長尾 真総長、両副学長をはじめ、各研究科長、事務局長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞があり、午後3時5分終了した。

各研究科別の内訳は、次のとおりである。

研 究 科	課程博士	論文博士	合計
文 学 研 究 科	18 ^人	12 ^人	30 ^人
教 育 学 研 究 科	1	2	3
法 学 研 究 科		2	2
経 済 学 研 究 科	12	1	13
理 学 研 究 科	100	4	104
医 学 研 究 科	85	16	101
薬 学 研 究 科	22	3	25
工 学 研 究 科	71	27	98
農 学 研 究 科	39	26	65
人間・環境学研究科	21		21
エネルギー科学研究科	12	1	13
情 報 学 研 究 科	19	7	26
計	400	101	501

医療技術短期大学部の動き

平成12年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月16日（金）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓出席のもと、卒業式・修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前10時45分終了した。

卒業生は、看護学科85人、衛生技術学科36人、理学療法学科18人、作業療法学科20人で、修了生は、専攻科助産学特別専攻19人の計178人であった。

